

平成五年 安居次講

注維摩經序說

木村宣彰

序

このたび夏安居の次講において『注維摩經』を講ずる機会を蒙ったことは、誠に光榮の至りであり感謝の念切なるものがある。

伝統ある安居は、古来より常に聖教・經論の蘊奥を究めた成果が披瀝せられる場であつた。ところが安居において『注維摩經』が講ぜられる機会はごく僅かであつた。そこで自ら学浅く短見にして力量の乏しきことを痛感するが、ここに安居の次講に講本として『注維摩經』を択び講じる所以は、先ず以て宗祖親鸞聖人が『教行信証』の「証卷」に、曇鸞大師の『浄土論註』をご引用になり、

肇公の言わく、「法身は像なくして形を殊にす。ならびに至韻に応ず。言なくして玄籍いよいよ布き、冥権謀なくして動じて事と会す」と。

と『注維摩經』の一文をお示しになっていることにある。この事実より推して祖意に参徹せんことを念じつつ、講本『注維摩經』を考究したいと希う次第である。

加えて、大乘の仏道の精髓を説き、潑刺たる在家仏教の発露である『維摩經』を通じて仏陀教説の

深意を究めたい。仏教經典は甚だ多いが、その中でも『維摩經』は、中国・日本の仏教において僧俗に愛読され、広くその名が知られている。この著名な大乘經典に対する注釈として圧倒的な權威を有するのが『注維摩經』十卷である。

鳩摩羅什三藏は、姚秦の弘始八（六〇四）年に長安の大寺において『維摩詰所說經』三卷を訳出し、三蔵自らがこの經の注解をなした。また、その訳場にあつた門下の僧肇をはじめとして僧叡・道融なども競つてこの經の注解をなしている。さらに竺道生は、僧肇の『維摩經』の注釈に啓発されて、この經を釈し深旨を發揮し新異を顯暢した。鳩摩羅什とその門下の僧肇及び竺道生の『維摩經』の注解は、もと別々に行なわれ世に持て囃されていた。この三師の注解は、後に合糅されて一書に編纂された。それが『注維摩經』である。この『注維摩經』は、訳者である鳩摩羅什の注解とその高弟である僧肇及び竺道生の注釈が併せて編集されたものであり、しかも現存最古の『維摩經』の注釈であることから拔群の權威と信賴を有して世に行なわれてきた。

古来、各宗の祖師もまた競つて『維摩經』を講じ注釈をなしている。それらの注疏は、おおむね自宗の宗義・教判を以て經意を解釈しているが、浅学にとつては却つて紛々擾々として多岐亡羊の憾を禁じ得ない。しかるに鳩摩羅什・僧肇・竺道生の三師の注解を合糅した『注維摩經』は、隋唐の諸宗派が成立する以前の注釈であり、各宗の宗義を離れて直に經文を解釈しており、しかも訳者自身の見

解が記されていることから『維摩經』の最高の指南となるものである。深遠な大乘經典の所説は、短見の及び難きものがあり、大乘精神を發揚するところの『維摩經』もまた難解である。そこで『維摩經』の注釈として格別の信賴がある『注維摩經』を虚心に講読することによつて仏陀教説の大意要領を得たいと切望するものである。

更に加えて『注維摩經』を考究する所以は、本書が『維摩經』劈頭の「仏国品」を殊の外に詳釈し、鳩摩羅什・僧肇・竺道生の三師がそれぞれ「浄土」についての見解を縷述している点にある。周知のように『維摩經』は巻頭に「仏国品」と称する一品をおき、仏国即ち「浄土」に関する教説を展開している。そこで中国仏教においては、古くから「仏国品」の解釈をめぐつて阿弥陀仏の浄土教の伝統とは別に『維摩經』にもとづいた浄土考究の流れが存在したのである。すでに鳩摩羅什とその門下の僧肇や竺道生との間で仏に浄土ありや否やなど「浄土」をめぐる種々の課題について見解の相違があつたと伝えられている。現に『注維摩經』によれば、鳩摩羅什は浄土の建立は仏力の功となし、竺道生らは浄土は衆生によつて成立する心の影響となしている。このように『維摩經』による「浄土」の研究の歴史は古い。そこで中国の浄土学においては誰しも『維摩經』の心浄即土浄の唯心浄土説にもとづく浄土研究を無視することはできなかつた。それ故、曇鸞・道綽・善導の中国浄土三祖はその論著において『維摩經』やその注釈の『注維摩經』に言及するのである。

周知のように『維摩経』の「仏道品」には、「高原の陸地に蓮華を生ぜず、卑湿淤泥に乃ち此の華を生ず」という有名な文がある。この「仏道品」の一文を宗祖親鸞聖人は「教行信証」の「証卷」及び「入出二門偈」にご引用になっている。また「教行信証」の「化身土卷」のご引文中にも「浄名云」として「仏国品」の教説の取意がある。殊に「教行信証」の「証卷」には、前述の如く「浄土論註」によるとはいえ「肇公の言わく」として『注維摩経』の僧肇の釈文をご引用になっている。

ねがわくは、このたびの『注維摩経』の講読に因って「不可思議解脱」によって自得せられた平等「不二」の智慧が照らしたす世界を窺い、深遠な「浄土」の聖意を会得する一助としたい。『注維摩経』の中で僧肇は、「新字は智浅く、未だ言を忘れて理を求むること能わず。本を捨て、末を尋ぬ」と教誡している。浅学を顧みず『注維摩経』を考究せんとするにあたり、文に封執して真の文意を失うことを畏れる。本序説には『注維摩経』の要領のみを記し、未だ尽くさざること多々あることを遺憾とする。

目次

序

第一章 『維摩経』の漢訳	1
第一節 『維摩経』の概略	1
第二節 「三存四欠」の漢訳諸本	6
第三節 『維摩経』の修治	17
第四節 『維摩経』の講讀	22
第二章 羅什の『維摩経』訳出とその実態	36
第一節 羅什以前の訳経	36

第二節 『毘摩羅詰經』とは何か	41
第三節 『注維摩經』所引の「別本」	50
第四節 羅什訳『維摩經』と「別本」	56

第三章 『注維摩經』の成立と流布

第一節 羅什・僧肇・竺道生の「単注本」	71
第二節 『注維摩經』の編纂	77
第三節 『注維摩經』の構成	87
第四節 『注維摩經』の改編	91
第五節 『注維摩經』の諸本	97
第六節 『注維摩經』の注釈	107

第四章 『注維摩經』の釈義

第一節 教相判釈	110
----------	-----

第二節 起尽・科文	119
第三節 經題釈	126
第四節 僧肇の「序」とその思想	132

第五章 『維摩經』諸品の概要

第一節 『維摩經』の構成	143
第二節 室外の説法	146
第三節 室内の説法	156
第四節 出室の説法	165

第六章 『注維摩經』の思想

第一節 仏国	169
第二節 方便	190
第三節 衆生	200

第四節 仏道	211
第五節 不二	218
第六節 如来	229

第一章 『維摩経』の漢訳

第一節 『維摩経』の概略

初期大乘経典を代表する『維摩経』は、中インド毘耶離(ヴァイシャリー Vaisali)に住む長者の維摩詰(ヴィマラキールティ Vimalakirti)の説法という戯曲的な構想でもって、空思想をふまえて大乘菩薩の実践のあり方を明らかにしようとした経典である。『維摩経』の主人公ともいうべき維摩詰は、毘耶離に妻子・眷属と共に生活している在家居士である。在家者でありながらも大乘仏教の精髓に洞徹した維摩詰は、もと妙喜世界から来た法身の菩薩であり、大乘の真精神を遺憾なく發揮し、この世界の凡夫や小乗声聞の分別・執着を破し、悉く大乘菩薩道に導くという役割を任っている。その名のヴィマラキールティ(Vimalakirti)は、漢訳では「毘摩羅詰提」「維摩詰」あるいは単に「維摩」などと音写する。その意味から「浄名」とも「無垢称」とも訳される。この意識語が示しているように維摩詰とは「垢を離れることにおいて名高い」「汚れ無き名声」という意味である。「垢を離れる」